

## 青柳優斗の場合

僕は自分の会社のあるこの大崎の駅が好きだ。最近大きなビルがいくつかできて過ごしやすくなった。スタバのあるツタヤが出来たおかげで町の品があがったような気もする。もっとも一、二回しか行った事はないけれど。夕方の打ち合せがひとつ飛んで、そのまま会社にいる気にもなれず僕は久しぶりにそのツタヤに行くことにした。最近DVDを借りるひとがずいぶん減ったらしい。がらんとしたそのフロアで準新作の映画をぼんやり眺めていた。彼女を見つけたのはその時だ。不動明。色白で少し不幸そうな表情をいつもする美人。僕の会社のデスクの女の子。彼女はCDのコーナーにいた。今時CDを借りるのか。でもなんとなくそれは彼女にとっても似合うことのように思えた。僕は彼女のそのつつましやかさが会社でもずっと気になっていた。ミナペルホネンのワンピースを着ていつも涼しげで、定時になるとすっと姿を消して、ほとんど無駄口をきかない女の子。不思議な気になる存在だった。

「ボガンボスなんか聴くんだ」

思い切って声をかけた。彼女がレジに置いたそのCDを僕も持っていたからつい。

「・・・・・・・・」

彼女は僕をじっと見た。体の中を透かして見られているような気持ちになった。

「ごめん」

「どうして？」

「急に声なんかかけて」

彼女は小さく笑った。そう見えた。

「ラジオで聞いた歌が好きだったから」

「今どきラジオ？」

僕がそう言うと彼女がすうっと距離をとった気がした。

「ごめん」

彼女はまたじっと僕を見た。吸い込まれそうな瞳にヘンな汗をかいた。じゃあ。そう言って彼女はツタヤを出ていった。結局、その日僕は何も借りる気にならずにうちに帰った。

それからひと月ほどしてまた彼女を見かけた。祐天寺の友人が車を売ってくれるというから見に来たその帰りだった。日曜日の駅は人影もまばらで、ゆるやかな坂をいつものように静かな柄のワンピースを着た彼女が歩いていくのが見えた。僕はその後ろ姿を追いかけた。追いついたらどうするのか、もし目が会ったらどうするのかまるで考えてなかったけれどとにかく追いかけてしまっていた。たぶん僕は彼女が好きなんだろう。彼女のことを知りたくて仕方なかった。彼女の肌の色白さ。少し高い声。ときどき皮肉な笑い方を小さくするその仕草。あれからときどき思い出していた。人はわからないものに惹かれるものだ。そうでなければ恋はずいぶん楽な感情だろう。わからないからわかりたくなる。わかりたくなるから普通ではないこと

をしてしまう。僕は彼女を追いかけながらミナのワンピースを何着もっているのかなとか。ボガンボスが好きならきっと RC も好きだろうな。多摩蘭坂とか知っているかなとか。てんで支離滅裂なことを考えていた。彼女が角を曲がった。僕は角の手前ままでまるで刑事みたいに一気に小走りした。

覚えているのはそこまでだった。

闇のなかに体が浮いていた。たくさんの低い人の声がまるで大きなスピーカーのなかにいるみたいに、籠った音になって体の周りをまわっていた。全部が怒りを含んでいた。気分が悪かった。指先だけが動いた。少しずつ動かして行くとやがて腕がのばせるようになった。でもあたりはすべて闇だった。指先にぬるっとした液体のようなものがついた。生暖かくて大きな生物の胃袋のなかにいるような気がした。何かに飲み込まれたのか。声はでなかった。正確に言うと、声はすぐ闇に吸収されて耳まで届かなかった。何が起きたのか思い出そうとしても思い出せなかった。生暖かい温度のなかでだんだんと眠くなってきた。怒りの声のなかに聞き覚えのあるものがあつた。小学校の担任の癩癩だ。会社の同期の悪口だ。テレビで見た事のある政治家の傲慢な演説。ワイドショーの司会者の薄っぺらな正義。母親の愚痴。そして自分の吐いた言葉たち。なまぬるい闇のなかに体は浮いたままだった。やがて何もかもが遠くなった。ただ眠くて何もかもがどうでもよくなった。そして闇が僕の全部を飲み込んだ。